

グローバル社会を生きる児童の英語能力の育成に向けて

環境情報学部 中浜優子

研究の背景

社会・経済のグローバル化が更に進む中、TOEFL のスコアの国別比較では、日本は残念ながら下位グループに属しているのが現状である。如何にして、英語学習に対する内発的動機づけを向上させるのか、英語でのコミュニケーション能力の素地づくりを早いうちから図るかという事が、我々教育者としてはもとより、子供を育てる親として、ひいては日本社会にとっての大きな課題であろう。すでにこれまでの文献から明らかになっていることとして、韓国、中国、台湾など他の東アジア諸国に比べ、小学校での英語の導入は5年から10年遅れて始まり、また対象年齢も上記の三か国が第3・4学年から週2回の授業が行われているのに対し、日本では、高学年からが対象で週1回の授業にとどまっている (Butler, 2015)。しかしながら、日本でも平成23年度より小学校第5・6年生から外国語活動として、英語がカリキュラムに組み込まれて以来、第3・4学年での外国語活動の導入に向けた補助教材も開発されてきている。また、平成32年度からは、小学校高学年においては、外国語活動ではなく、「教科」としての外国語(英語)が開始されることになっている。さらに、文部科学省(2015, 2016)によると、高学年においては、「読むこと」が目標に掲げられていることから、これまでの異文化に触れる、コミュニケーション重視の教育に加え、アルファベットの読み書き、ひいては英語におけるリテラシー教育の素地づくりも試みようとしているのが分かる。

これらの試み自体は素晴らしいものの、外国語活動の必須化がなされた年の調査によると、調査対象となった小学5, 6年生の38%がこれらの活動について「低意欲・高不安」の気持ちを抱いているのが報告されている(横石・北條 2013)。では、子供たち

の不安を払拭させ、英語に対する動機づけを上げるにはどうすればよいのか。第二言語が効率よく学ばれるのは、対象言語を用いて内容のあるもの（主に教科科目）を学ぶときであるとされている（アレン玉井 2010）。これは、ヨーロッパ発祥のアプローチ、CLIL(Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習)の考え方と重なる。CLILとは言語学習と内容学習を統合して指導する中、外国語の4技能（聞く・話す・読む・書く）を育成する手法で、4つのC(Content, Communication, Cognition, Community)が融合されたうえで、言語教育の質的向上が上がるという理念に基づいたアプローチである。国内でも、小学校外国語活動として内容言語統合型学習を導入している学校も増えてきており、また内容言語統合型学習を導入することで、英語学習の動機づけが向上するとの実践研究の報告もなされている（二五 2014, 内藤 2015 等）。

研究の概要

上述の通り、言語学習における動機づけおよび、内容言語統合型学習の重要性、そして、日本の英語教育の実情を鑑み、英語で教科指導が行われ、かつ母語の保持も念頭に置きながら教育が展開されている、シンガポールの公立小学校の英語の指導・学習状況を中心に調査した。（本報告書は、一般にもアクセスできるということなので、応用言語学研究領域のプロトコルに倣い、学校名は記載しないでおく。）

具体的には、9月と11月にそれぞれ公立小学校A,B,2校を訪問し、校長と英語担当教員との面談、9月のみ授業観察(Primary 4)を行った。11月に出張した時はちょうど公立小学校が休みに入ってしまった、授業観察はできなかった。(10月に出張を予定していたが、申請者が体調を壊してしまい、出張自体が直前でキャンセルになり、小学校Cには、その旨伝えて了承を得た。)また、比較のために、11月に日本人学校における英語の授業観察(Primary 1,2,3,4)と、インターナショナルスクール(Primary 1)も訪問し、授業観察及び英語担当教員との面談を行った。最後に、2月下旬に日本で内容言

語統合型学習を積極的に行っている私立小学校一校を訪問し、授業観察(Primary 1～6)を行った。観察方法としては、Nunan (1989)の観察用チェックリストを使用した。チェック項目としてあるのは、教師による提示質問及び指示質問の総数、教師による文法・語彙の意味・機能・レッスンのテーマの説明、教師によるこれから何をするかなどの指示、教師による学習者の称賛、批判、学習者からの質問数、教師の質問への学習者の答えの総数、学習者同士の対話、(不理解による)沈黙や混同である。チェックリスト以外にも、教師による誤用訂正の手法(リキャスト、明示的訂正等)、時間配分なども記録した。インフルエンザ罹患やその他の理由で、内容言語統合型学習を行っている私立小学校の訪問が、2月の下旬になったため、量的データは現段階で分析途中であるが、教師とのディスカッションを踏まえた上での、観察データの定性的な特徴を以下にまとめる。1)シンガポールの英語の授業内容はMOE(教育省)のガイドラインにより、ほぼ決められており、特に小学校中学年以降はPSLE(全国統一中学入試)に備えての勉強にも時間が使われるので、統一的な授業になる傾向もある。特に、今回観察できた授業の時期が、口頭試験(Stimulus Based Conversation: SBC)の前だったことから、テストの準備が大半を占めており、通常の英語の授業とは学習目的を異にしていたのではないと思われる。

2)シンガポールにおいては、「外国語としての英語学習」ではなく、「第二言語としての英語学習」(英語が公用語として、日常の生活でも使用されている環境下での英語習得)なので、英語以外の科目もすべて英語で行われている。英語の授業に関して言えば、児童の母語(中国語・タミール語・マレー語)が使われることはなく、使用言語はすべて英語である。内容的には、PSLEの準備以外は、インターナショナルスクールの授業と類似している。3)データの量的分析は、上述の理由により、2018年2月28日現在でまだ終わっていないが、印象としては、インターナショナルスクールもシンガポールの公立小学校も、学習者の誤用訂正は、明示的なタイプのものは少なく、リキャス

ト（教師が正用を提示すること）が大半を占めていた。4）日本人学校の場合、学習者の英語のレベルによってクラス分けがなされており、熟達度が上がれば上がるほど、英語の指導スタイル及び誤用訂正スタイルは、シンガポール公立小学校とインターナショナルスクールに類似する傾向があった。5）内容言語統合型学習を行っている私立小学校では、英語の授業が毎日あり、指導法も学年に応じて変えている。研究代表者の予測とは反対に、低学年では日本語による説明はあまりなされず、英語の繰り返しによる指導の傾向がみられた。中学年よりフォニックスが導入され、高学年になると使用言語は英語ではあるが、文法説明などは日本語が入ることもあり、高学年の高い認知レベルにあった言語教育法だとも解釈できる。

すべての学校に共通していると思われるのは、コンテキストの中での英語指導に心がけていたということである。例えば、インター以外では、Primary 1において、ゲームなどを使い、語彙の定着を図っていた。インターでもタスクは行われていたが、ゲームというよりは、ディトグロス形式で文章を協同的に構成していく、といったような少々レベルの高めのタスクであったことも特筆すべきであろう。また、母語を喪失しないため、そして母語による礼儀・常識を培ってもらうために、シンガポールの公立小学校では、道徳などの授業に関しては中国語で行われていた。興味深いことに、中国語教育という意味では、今回訪問したインターナショナルスクールでも、中国語が準公用語となっていることを鑑み、中国語の授業を生徒のレベルに合わせて、細かいレベルに分け、毎日開講していることが分かった。また、英語の授業に、英語のネイティブの教師以外に、もう一名中国語のネイティブ教師が付き、指示などは時々中国語で行っていたのも印象的である。このように、インターナショナルスクールでありながら、バイリンガル教育も推奨しており、これからの外国語教育の見本となるのではないかと思われる。内容言語統合型学習を推奨する日本の小学校でも、高学年になると日本語の構文と英語の構文を単なる直訳にならないように工夫をしながら、紹介していたのも、認知レベルの

高くなった学習者に日本語の概念も常にリマインドさせる意図があったのではないかと推測する。

授業観察を行ったほか、シンガポールで教員養成を行っている機関である国立教育学院 (National Institute of Education: NIE) の担当教員とも数回にわたりディスカッションを行った。中でも、特に、シンガポールの英語初等教育およびリテラシー教育の第一人者である Dr. Wong と、英語初等教育の研究の意見を多く交わした。当初は、2018 年の 1 月に Wong 氏を日本に招聘し、日本の私立小学校二校を訪問していただき、シンガポールにおける初等英語の教授法などのワークショップを開催することを予定していたが、Wong 氏のご家族の事情でご訪問が叶わなくなった。2018 年度には実現させるよう働きかけるとともに、ご家族のご事情に変化がなければ、NIE 英語教員養成プログラム(教授法)のチームの教員を招聘することも視野に入れている。Wong 氏とは、私がシンガポール出張の際、そしてスカイプでディスカッションを何度か重ねた。シンガポールにおける英語初等教育について、またリテラシー教育全般について話し合ったが、シンガポールでも受験に向けた英語学習への対応だけでなく、対話能力、リテラシー向上のためにも、小さいころからの(絵)本を読むことの重要性がカギになると思われる。日本でも、就学までに簡単な英語の絵本は導入されることもあると思うが、就学後も、ポストモダン的な位置づけを持つ、対話型絵本についての教授法の可能性についても、議論を重ねた。シンガポールでも、「絵本」ということで、知的刺激の少ないものだと毛嫌いする親も少なくはなく、また、これまで先行研究でも小学校高学年に絵本の読み聞かせをするのは、対象者の認知レベルにそぐわないのではないのかと言われてきた。しかし、単なる「お話」ではなく、課題を提供したり、物事の是非について質問形式で問いかけたりする、「考える」ことを推奨するインタラクティブなポストモダニズムの絵本は、小学校高学年、ひいては中学生の認知レベルにも適切ではないかと考える。

ここで、公用語としての英語に毎日触れているシンガポリアンに比べ、外国語として教室の中だけで英語に触れる日本の児童を対象とした教材について話し合った。その結

果，児童だけではなく，親も一緒に対話できるような，インタラクティブな（絵）本，その解説書の開発までもが望ましいのではないかという結論に至った。ただ，日本ではシンガポールとは違い，成人でも英語運用能力がそれほど高くない場合もあるので，ごく基本的な内容が望まれる。教室内での英語教育に関しては，学習可能性・指導可能性を念頭に置きながら，内容言語統合学習を推奨している小学校の1年生の授業で見られたように，最初は発話なしで，見様見真似でアクトアウトすることで，受容能力を促進させるTPR(全身反応法)から始めるのが，比較的入りやすいであろう。学年が進むにつれて，語彙，構文などもストーリーの中で導入し，リテラシー能力育成も進めていけるのではないかと考える。

おわりに

本研究の究極的な目標として掲げたことは，アジア圏で英語能力が最も高いシンガポールの英語教育を様々な角度から分析することで，日本語を母語とする児童が，これから不安感を持つことなく，楽しみながら国際語としての英語でコミュニケーションをとり，真の意味での国際人に育って行ってもらうための手助けをすることであった。今回は，一般的な日本の小学校の訪問はできなかったが，英語が公用語とされている環境での英語の授業（シンガポール公立小学校，日本人学校），インターでの（英語母語話者が対象の大半をしめる）英語の授業，そして内容言語統合型学習を推奨する画期的な小学校での英語教育の観察から得ることも多かった。これからの英語でのコミュニケーション能力の素地づくりを早いうちから図り，かつ母語の喪失も防ぎ，ダブルリミテッド状態に至らないようにするのかというのも，今回の数校の小学校の訪問によりヒントを得ることができた。上述のように，インタラクティブなストーリーテリングを抽出できるようなタイプの対話型絵本なども導入することも推奨する。